

マタイ 6 章 9～13 節 (: 11) 「日ごとの糧」

主の祈りの前半の三つの祈りは神様に関することを祈っています。まず神様に目を向け、神様に関することを祈ることが大切です。このことは私たちの信仰の態度にも関わってきます。私たちの信仰生活は自分の満足のため、自分の願いの追求のためではなく、神様を中心として、神様の栄光を現すものであるべきです (I コリント 10 : 31)。主の祈りの後半の祈りは、「私たちの糧」「私たちの負い目」「私たちを悪から」というように、「私たち」に関する祈りです。私たちの必要についての祈りですが、神様の栄光を現すことから離れてはならないのです。

1 私たちの糧

後半の最初の祈りは「私たちの糧」に関する祈りです。ここで前半の祈りとの落差を感じるでしょうか。神様の御名、御国、みこころに関することを祈ってきたのですが、それに続いて私たちに必要な食物ことを祈ります。急に物質的な次元が低い願いになったように感じるかもしれません。どうして主イエス様は「私たち」に関する祈りを「私たちの糧」のことから始めるように教えたのでしょうか。それは、私たちは今生きていますし、これからも生き続けて、神様の栄光を現していくことを求められていますので、生きるために必要な糧を求めて祈るということでしょう。

神様は私たちが生きていくために必要なものを与えてくださっています。そのことは神様がこの世界を創造された御業に表され、また常にこの世界を保っておられる御業に表されています。創造の御業の最後に人が造られました。それは見方を変えれば、人が生きられるようにこの世界のすべてを造り、整えてから、地の上に人を造り、置かれたということです。また、神様は地の上で人が生きられるようにこの世界を保っておられます。神様は「あなたがたに天からの雨と実りの季節を与え、食物と喜びであなたがたの心を満たすなど、恵みを施しておられたのです」(使徒 14 : 17)。そのように、神様がこの世界を造り、保ち、私たちに必要なものを与えて、私たちを生かしてくださるのです。

私たちのからだの必要に応えてくださる恵み深い主であることは、イエス様のお姿からも分かります。イエス様は、もとに集まって来た大勢の群衆をご覧になり、「彼らを深くあわれんで、彼らの中の病人たちを癒され」ました。また、夕方になり、食べ物がない中で、わずかなパンと魚から大勢の群衆が満腹になるほどに食べさせました (マタイ 14 : 14～21)。そのように主イエス様は人々のからだの必要に応えました。

同じように神様は、今も、私たちに、生きていくために必要なものを与えてくださっています。そのような神様だからこそ、「私たちの糧」をお与えくださいと祈るのです。

私たちが生きていくために必要なものを祈り求めることは、自己中心的に思われるかもしれません。しかし、私たちが必要とするものを求めて祈ることは、神様への信頼の表れですし、神様への礼拝となります。

日々の生活で必要とするものを神様に求める時、私たちは神様によらなければ生きられないこと、私たちが持っているものはすべて神様から与えられていることを告白しているのです。

主イエス様は父なる神様について、「父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」(マタイ 5 : 45) と言っておられます。神様は本当に愛にあふれた方ですので、生きるために必要なものを誰にでも与えてくださいます。それでは、求めている人々にも食べ物や色々なものを与えておられるのであれば、どうして祈る必要があるのでしょうか。

それは、神様に依り頼む人々に対して、神様は必要を満たすと約束されているからです。詩篇に「主を恐れよ。主の聖徒たちよ。主を恐れる者には 乏しいことがないからだ。若い獅子も乏しくなり 飢える。しかし 主を求める者は 良いものに何一つ欠けることがない」(34:9～10)とあります。そのように、主は、求める者に対して、必要を備えてくださり、良いものを与えてくださるお方ですから、そのあわれみ深い主に対する信頼を表して祈るのです。そして、祈って与えられることで、神様の恵みに気づき、感謝し、神様を礼拝することになるのです。

2 日ごとの糧を今日も

次に、この祈りから、私たちが注意すべきことを三つ確認したいと思います。一つは、糧を自分で獲得しているのではないということです。私たちは糧を得るために働いているので、気をつけていないと、糧は自分の力や努力によって獲得しているのだと思っていることがあるのではないのでしょうか。

もちろん、糧を得るためにそれぞれが働いていて、肉体的にも精神的にも大変な労苦を負って、その報酬を得ていることは言うまでもありません。しかし、そのように働くことができるのも、職場や健康や能力や家族の支えなど様々なこと

を神様が与えてくださっているからではないでしょうか。糧は神様の恵みによって与えられているのです。自分の力だけで確保しているではありません。そのことを忘れて、高慢にならないように注意しなければなりません。申命記に「あなたは心のうちで、『私の力、私の手の力がこの富を築き上げたのだ』と言わないように気をつけなさい」(8:17)とあります。「日ごとの糧を、今日もお与えください」と祈るごとに、神様の恵みを感謝して、高慢にならないように自分の心を見張るのです。

二つ目は、将来の保証と安定を願うのではないということです。「日ごとの糧を、今日もお与えください」と祈るということは、今日一日に必要な糧を今日も与えてくださいと毎日求めるということです。私たちはできればずっと先までの糧を確保しておきたいのです。この不安定な社会の中で、誰でも将来の保証と安定を確保したいと願います。それができないと不安になります。けれども、もし自分が安心できるものを蓄えることができたとしても、私たちには将来のことは分かりません。

「日ごとの糧を、今日もお与えください」と祈り、今日一日の糧を今日も与えてくださいと毎日祈り、神様に感謝して、そのようようにして神様との交わりを日ごとに持つことが、心配しすぎないで、平安のうちの歩むための鍵です。

そのような原則が分かりやすく示されたのは、荒野においてイスラエル人に与えられたマナによってでした。食べ物を得られない荒野において、天からのマナによってイスラエル人は養われました。そのマナは毎朝、一日分を集めるように命じられました。そして、彼らが主の命令に従うかどうか試みられました。ところがある者は翌日まで残しておこうとして、結局腐ってしまいました。また、安息日にはマナは降らないと告げられ、前日に二倍のマナを集めることができました。ところがある者は安息日の朝にもマナを集めようと出て行きました。主の命令に従わない者たちがいました。

私たちもそのような不信仰に陥りやすく、目に見えるもの、自分で集めたものに頼ろうとすることがあるでしょう。そのような罪に陥らないように、「日ごとの糧を、今日もお与えください」と毎日祈り、そして神様の恵みを感謝して、神様との交わりを日ごとに持っていくことを、主イエス様は教えてくださっているのです。

注意すべきことの三つ目は、自分の欲望を追求するのではないということです。日ごとの必要のために祈って良いと教えられていますが、私たちが必要だと思うならどこまでも求めて良いということではありません。「日ごとの糧を、今日も」と祈るということは、必要なものを必要な分だけ求めるということでしょう。つまり、自分の欲望のままに何でも求めて良いのではないのです。「日ごとの」と訳されていることばは、欄外にあるように、「必要な」とも訳せます。主イエス様が教えたのは「必要な糧」を求めることです。

イスラエル人は荒野でマナを与えられて喜び、しばらくは満足していました。けれども、そのうちに彼らはエジプトを懐かしみ、「肉が食べたい」と求めました。神様はそれに応じて、うずらの肉を飽きるほど食べさせましたが、その時に神様の怒りが燃え上がったのです。欲望のままに求めることに対しての警告でした。

私たちの周りでは多くの情報や広告によって欲望が掻き立てられています。何が必要で何が必要でないのか見分けることが難しくなっています。自分が必要だと考える場合でも、神様はそうお考えではないかもしれません。その判断の助けの一つは、主の祈りの前半で祈ってきたことに照らしてみることです。それを求めることが、御名が聖なるものとされることになるのか、御国が来ることになるのか、みこころが行われることになるのか、と考えることです。私たちは「必要な糧」を求め、それが本当に必要であれば、神様は与えてくださいます。

3. 自分のためだけではない

この祈りは自分のためだけに祈るものではありません。私の糧ではなく、「私たちの」糧のために祈ります。自分に糧が与えられることだけを求めているではありません。「私たちの」と祈るとき、視野を広げるようにと導かれます。「日ごとの糧」を得ることに困っている人々が、私たちの周りにも、また世界のいたるところに多くおられます。祈りの中でそのような人々のことを覚え、そして行動できるようにと願います。

また、「糧をお与えください」と祈り、主が与えくださるなら、自分が祝福を受けるだけで終わってはいけないと思います。神様の恵みによって日ごとの糧を与えられて、私たちが生きているのですから、私たちのいのちを神様に仕えるために用いたいと願います。神様によって生かされ、神様の栄光を表すために生きて行きたいのです。